

## 長崎県レッドリストの中間見直しについて

### 1. レッドリスト中間見直しの目的

生物多様性保全のための基礎資料であるレッドリストについて、平成22年度末の改訂から5年間に経過したことから、希少な野生動植物の最新の生息・生育状況を反映させた中間見直しを行い、保護と生息・生育環境の保全に資することを目的とした。

### 2. 中間見直し作業

レッドリスト改訂後の5年間に、長崎県希少野生動植物モニタリング委員会(以下、「委員会」)委員により実施された調査結果や新たな知見等に基づき、平成28年度委員会において以下の種について見直しを行った。

- ①生息生育環境の変化等の様々な要因により絶滅のおそれが高まっていると考えられるレッドリスト未掲載種
- ②カテゴリー等を見直す必要があるレッドリスト掲載種

長崎県希少野生動植物モニタリング委員会

役職	担当分野		氏名	所属・職業
会長	植物	維管束植物	中西 弘樹	長崎大学名誉教授
委員		藻類	飯間 雅文	長崎大学准教授
副会長	哺乳類・海産哺乳類・両生類・爬虫類		松尾 公則	長崎女子短期大学教授
委員	鳥類		馬田 勝義	(公財)山階鳥類研究所標識調査協力調査員
委員	魚類(淡水魚類、浅海魚類)		深川 元太郎	(公社)長崎県食品衛生協会
委員	甲殻類・剣尾類等		中原 泰彦	西部環境調査(株)
委員	貝類		川内野 善治	ふるさと自然の会会長
委員	クモ		奥村 賢一	県立長崎鶴洋高等学校教諭
委員	昆虫類	鱗翅類	峰 正隆	県立鳴滝高等学校教諭
委員		甲虫類	松尾 照男	西海学園高等学校非常勤講師
委員		水生昆虫	大庭 伸也	長崎大学准教授

見直しにあたり以下の方々にも多大なご協力ご支援をいただいた(敬称略)。

(魚類) 小原 良典 長崎市立長浦小学校教諭

(甲殻類・剣尾類等) 下條 清隆 西部環境調査(株)、樋口 一成 長崎市科学館、  
中原 幹 川棚町立石木小学校

(貝類) 福田 宏 岡山大学、石川 裕 宇和島市、亀田 勇一 国立科学博物館、  
神田 正人 佐伯市、多田 昭 東かがわ市

(昆虫類) 今坂 正一 久留米市、下條 清隆 西部環境調査(株)、  
田中 清 長崎市、山元 宣征 長崎市、山本 啓弘 長崎市、  
井上 真一 長崎市、桃下 大 諫早市

### 3. 対象分類群

○平成 22 年度に改訂した長崎県レッドリスト掲載の 13 分類群とした。

(1) 維管束植物	(2) 蕨苔類	(3) 藻類	(4) 哺乳類	(5) 鳥類
(6) 爬虫類	(7) 両生類	(8) 魚類 (淡水魚類・浅海魚類)	(9) 海産哺乳類	
(10) 甲殻類・剣尾類等	(11) 貝類	(12) クモ類	(13) 昆虫類	

### 4. レッドリスト中間見直し結果

見直し後の長崎県レッドリストに掲載された種は、維管束植物 570 種、蕨苔類 34 種、藻類 12 種、哺乳類などの脊椎動物 226 種、昆虫類など無脊椎動物 622 種の計 1,464 種となった。

また、カテゴリー別には、絶滅 (EX) 26 種、絶滅危惧 I A 類 (CR) 246 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 301 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 343 種、準絶滅危惧種 (NT) 460 種、情報不足 (DD) 72 種、地域個体群 (LP) 16 種となった。

分類群	カテゴリー ( )内は見直し前								
	絶滅 EX	野生絶滅 EW	絶滅危惧 I 類		絶滅危惧 II 類 VU	準絶滅 危惧 NT	情報不足 DD	絶滅の おそれの ある地域 個体群 LP	計
			絶滅危惧 I A 類 CR	絶滅危惧 I B 類 EN					
維管束植物	21		103	151	134	146	15		570
	(12)		(103)	(189)	(108)	(130)	(24)		(566)
蕨苔類					2	26	6		34
					(2)	(21)	(6)		(29)
藻類			1	1		9	1		12
			(1)	(1)		(7)	(3)		(12)
哺乳類			3	1	5	8	3	1	21
			(3)	(1)	(5)	(8)	(3)	(1)	(21)
鳥類	1		19	12	28	55	0	0	115
	(1)		(43)	(24)	(7)	(51)	(10)	(4)	(140)
爬虫類				3	1	7	2		13
				(3)	(1)	(7)	(2)		(13)
両生類			1	2	3	5			11
			(1)	(2)	(3)	(5)			(11)
魚類(淡水魚類・ 浅海魚類)	1		13	4	13	19	10	5	65
	(1)		(13)	(5)	(13)	(19)	(9)	(4)	(64)
海産哺乳類				1					1
				(1)					(1)
甲殻類・剣尾類等			5	8	7	22	6		48
			(8)	(6)	(7)	(21)	(7)		(49)
貝類	2		40	46	65	72	13		238
			(37)	(40)	(25)	(69)	(27)		(198)
クモ類						8	2	1	11
						(8)	(2)		(10)
昆虫類	1		61	72	85	83	14	9	325
	(1)		(46)	(81)	(84)	(56)	(1)	(9)	(278)
計	26		246	301	343	460	72	16	1464
	(15)		(255)	(353)	(255)	(402)	(94)	(18)	(1392)

## 5. 経過および今後の予定

平成 22 年度 レッドリスト改訂

平成 23 年度 モニタリング調査の実施

～平成 27 年度

平成 28 年度 モニタリング調査及びレッドリスト中間見直し

平成 29 年度 モニタリング調査の実施

～平成 31 年度

平成 32 年度 レッドリスト改訂着手

平成 33 年度 レッドリスト改訂

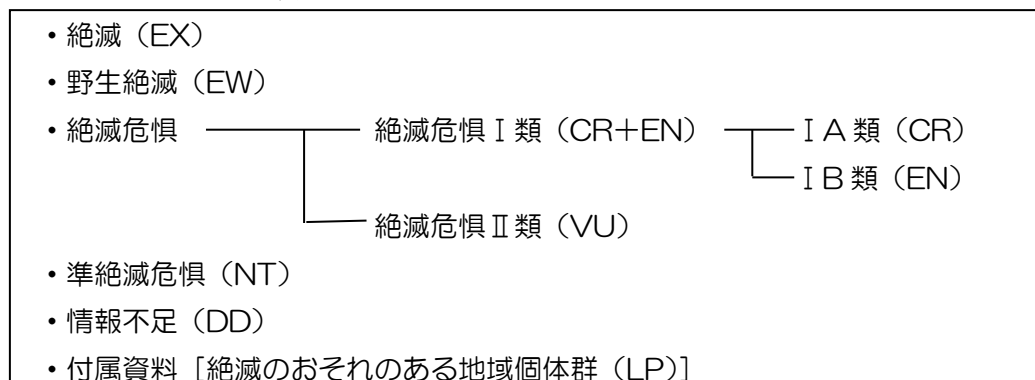
## 【参考】

### カテゴリー区分・定義

#### (1) カテゴリー区分

当初の県レッドデータブック作成時と同様で、環境省レッドデータブックカテゴリーに準じることとする。

#### 環境省レッドデータブックカテゴリー



#### (2) カテゴリー定義

##### ☆絶滅 (EX : Extinct )

長崎県ではすでに絶滅したと考えられる種

##### ☆野生絶滅 (EW : Extinct in the Wild )

飼育・栽培下でのみ存続している種

##### ☆絶滅危惧 I 類 (CR+EN)

絶滅の危機に瀕している種

現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの

##### ◇ I A 類 (CR : Critically Endangered )

ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの

##### ◇ I B 類 (EN : Endangered )

I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの

##### ☆絶滅危惧 II 類 (VU : Vulnerable )

絶滅の危険が増大している種

現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの

##### ☆準絶滅危惧種 (NT : Near Threatened )

存続基盤が脆弱な種

現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに以降する要素を有するもの

##### ☆情報不足 (DD : Data Deficient )

評価するだけの情報が不足している種

##### ☆絶滅のおそれのある地域個体群 (LP : Threatened Local Population )

地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの

## 6. 代表的な種

### 【維管束植物】

チョウセンスイラン[マンシュウスイラン] (キク科) 【絶滅危惧 I A類 (CR) →絶滅 (EX)】



大陸系の植物で、県内では諫早市の湿地 1 ヲ所  
にのみ生育が知られていた。湿地周辺の樹木が  
茂り日当たりが悪くなるなど、湿地の環境変化  
により、数年以上前から見られなくなった。生  
育地は 1 ヲ所であり、そこが消滅したので、絶  
滅と判断された。 (中西弘樹)

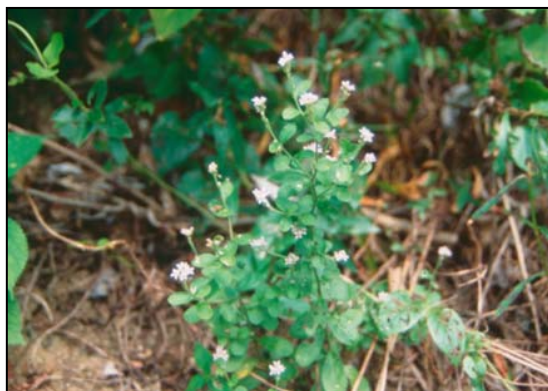
チャポイ (カヤツリグサ科) 【絶滅危惧 I A類 (CR) →絶滅 (EX)】



環境省のレッドリストにも絶滅危惧種 (VU)  
に選定されているように全国的に少なくなっ  
ている。生育地は沿岸の湿地であり、絶滅の主要  
因は埋め立てである。県内では対馬市美津島町  
と南島原市加津佐町にのみ生育が知られてい  
たが、前者は埋め立てによって湿地が消失した  
のが、後者は海水が流入し環境が変化したのが  
原因と思われる。これまで知られていた 2 ヲ所の  
生育地がいずれも消滅し、絶滅と判断された。

(中西弘樹)

ハナナズナ (アブラナ科) 【絶滅危惧 II類 (VU) →絶滅危惧 I A類 (CR)】



大陸系の植物で、日本では対馬と中国地方の  
一部に分布しているが、中国地方はすでに絶  
滅し、現在は対馬のみに知られている。古い  
記録では対馬全域に産していたが、最近では  
シカの食害でほとんどの地域で見られなくなり、  
現在は対馬南部のごく一部でしか見られない。  
ここでも生育状態も悪く、絶滅寸前の状態  
である。 (中西弘樹)

【藻類】

トサカノリ（ミリン科）【情報不足（DD）→準絶滅危惧種（NT）】



漸深帯（干潮線よりも下の常に海面下の場所）のやや深い海底に生育する海産紅藻で、鮮紅色の大型種である。長崎県本土沿岸では、20年ほど前まで各地沿岸で打ち上げ藻体が見つかったが、磯焼けの影響で生育がほとんど確認できなかった。2016年長崎市野母町田の子島海岸で、久しぶりに打ち上げ藻体が確認された。

（飯間雅文）

【哺乳類】

ヤマネ（ヤマネ科）【絶滅危惧Ⅱ類（VU）→絶滅危惧Ⅱ類（VU）】



多良山系の自然林に広く生息するが個体数は少ない。小型で樹上性、さらに夜行性であるため目撃することは稀。自然林に生息し、森の妖精とも呼ばれる。食物の少ない冬期は、哺乳類としては珍しい冬眠という方法で乗り切ることでも有名。1975年、国の天然記念物に指定されている。

（松尾公則）

【鳥類】

ウズラ（キジ科）【準絶滅危惧種（NT）→絶滅危惧Ⅱ類（VU）】



野生のウズラは、県内に冬鳥として渡来するが、対馬では繁殖例もある。農耕地の周辺や草原、牧草地に生息するが、草原の開発、耕地整備で稀にしか観察できなくなっている。

（馬田勝義 写真：中山恵美子）

### 【爬虫類】

ダンジョヒバカリ（ナミヘビ科）【準絶滅危惧種（NT）→準絶滅危惧種（NT）】



男女群島だけに生息する長崎県の固有亜種。男女群島は国指定の天然記念物で、女島には灯台が設置されているが、2006年より無人島となった。本種は世界で男女群島の男島だけに分布する貴重なヘビである。体長20～30cmの小型のヘビで、林内の倒木や石の下に潜み、落ち葉や土中のミミズを補食する。県内各地に広く分布するヒバカリの亜種として、1986年に記載された。

（松尾公則）

### 【両生類】

ツシマアカガエル（アカガエル科）【準絶滅危惧種（NT）→準絶滅危惧種（NT）】



世界で対馬だけに分布する固有種。冬期から初春にかけて水田や水路、水たまりに産卵する。対馬では適当な水場が少ないため、ちょっとした水場には多数の成体が集まり産卵行動を行う。対馬全島で水田の放棄や湿地が減少しており、今後ますます減少すると考えられる。

（松尾公則）

### 【魚類】

中通島のタカハヤ（コイ科）【絶滅のおそれのある地域個体群（LP）※新規】



タカハヤは長崎県内では主に河川の上流部に生息するコイ科魚類。全長10cm程になる純淡水魚で、体表のぬめりが強い。長崎県では県本土、福江島、対馬などで比較的普通にみられる。今回、五島列島中通島ではごく限られた河川にしか生息していないことが確認され、源流部での開発などで絶滅の恐れがあることから、絶滅のおそれのある地域個体群に選定した。

（深川元太郎）

【甲殻類・剣尾類その他】

ハラグレチゴガニ（コメツキガニ科）【絶滅危惧ⅠA類（CR）→絶滅危惧ⅠA類（CR）】



有明海奥部の河口域の泥干潟に生息している。同属のチゴガニと非常によく似ているが、オスの腹節が狭くくびれているため見分けることができる。また、チゴガニより粒径が小さな泥底を好む。諫早湾締め切り以前は本明川の河口域に広く多数が生息していたが、近年はほとんど確認されていない。（中原康彦）

カプトガニ（カプトガニ科）【絶滅危惧ⅠB類（EN）→絶滅危惧ⅠB類（EN）】



内湾や河口域に生息し、繁殖期には浅い砂質の干潟を訪れて産卵する。幼体の時期に砂～砂泥質の干潟で過ごし、成体になると深い海域へ移動する。干潟の埋め立てや河口域の護岸や浚渫により産卵場所や幼体の生息場所が減少している。また、成体が底曳網等で混獲され、陸上に放棄されることも個体数の減少に繋がると考えられる。（中原康彦）

【貝類】

ゴトウノブエガイ（新称）*Nobuea* sp.（ヤマタニシ科）【絶滅危惧ⅠA類（CR）※新規】



【分布】①世界：日本固有種。②全国：長崎県固有種。③県内：五島列島固有種。

【種の特徴】

殻長約 3.5mm、殻径約 5.8mm の陸産貝類で、殻は白色で螺塔が低く、体層に 118～160 本の縦肋を等間隔に並べる。殻口は円く、唇縁は肥厚しない。臍孔は広い。蓋は円く茶褐色で、石灰化しない。愛媛・宮崎両県の計 3 箇所のみで記録され「日本最稀少陸産貝類」(湊・西, 1996; 湊, 2012) として名高い *Nobuea kurodai* Minato & Tada ニッポンノブエガイに近縁であるが、後種



は縦肋がより細かく数も 192~283 本と多いことで識別される。これら 2 種が属すと考えられる *Nobuea* Kuroda & Miyanaga ノブエガイ属は従来ゴマガイ科またはヤマタニシ科に属すとされてきたが、比較解剖及び分子系統解析の結果この属はどちらにも含まれず、アズキガイ科の姉妹群であり、新しい科を設ける必要がある(福田他, 準備中)。

【生息生育情報】

2013 年に初めて発見された。生貝は五島列島の極めて狭い範囲(約 0.0025km<sup>2</sup>)からのみ知られている。ニッポンノブエガイは 1 個体の寿命が長い(少なくとも 5 年)ことから恐らく少卵で、本種も同様と考えられ、総生息個体数はわずか数百個体以下と見積もられる。

【生息生育に対する脅威】

森林伐採、植林、植生変化、土壌汚染、土地造成、地球温暖化に伴う過剰乾燥、コレクターや標本商による乱獲、個体群の極小化・孤立。

(福田 宏・亀田勇一・川内野善治)

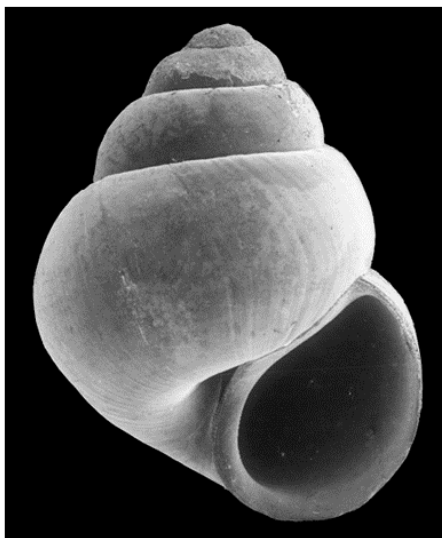
ナラオゴマオカチグサ(新称) *Cavernacmella* sp. (カワザンショウ科)

【絶滅危惧 I A 類 (CR) ※新規】

【分布】①世界:日本固有種。②全国:長崎県固有種。  
③県内:五島列島固有種。

【種の特徴】

殻長約 2 mm、殻径約 1.5 mm の陸産貝類で、殻は卵円錐形で薄い硝子質、光沢が強く、半透明で無色。後成層の彫刻は弱い成長脈のみ。臍孔は広く明瞭。黄褐色で半月形の薄い蓋を持つ。広葉樹の根元に堆積した落葉下に生息する。本種が属す *Cavernacmella* Habe ゴマオカチグサ属の種は、岩手~沖縄県と小笠原諸島の海岸、森林内、溪流、石灰岩洞窟に産するが、本州・四国・九州で里山の林床に産する種は本種だけである。



環境省第 4 次レッドリストでは同属の *C. kuzuensis* (Suzuki) ホラアナゴマオカチグサは絶滅危惧 I 類、*C. minima* (Habe) キビオカチグサと *C. yamamotonis* (Minato) ヤマモトゴマオカチグサは絶滅危惧 II 類に指定されているが、本種はそれらと比べても極端に生息範囲が狭く、より危機的な状況にある。

【生息生育情報】

五島列島中通島の南松浦郡新上五島町奈良尾郷の奈良尾神社社殿裏からのみ知られ、生息地の面積は 0.0002km<sup>2</sup> しかない。1990 年代に神田正人氏によって発見され、当時は多産していたという。2012 年 2 月に調査した際は、蓋と乾燥した軟体の残る死殻 1 個体が見出されたため、その時点でも生息していたことは疑いないが、2013 年 11 月には確認できなかった。

【生息生育に対する脅威】

森林伐採、植林、植生変化、土壌汚染、土地造成、地球温暖化に伴う過剰乾燥、コレクターや標本商による乱獲、個体群の極小化・孤立。

(福田 宏・亀田勇一・川内野善治)

ダンジョナメクジ（新称）*Meghimatium* sp.（ナメクジ科）【絶滅危惧Ⅱ類（VU）※新規】



【分布】①世界：日本固有種。②全国：長崎県固有種。③県内：男女群島固有種。

【種の特徴】

体長約 55 mm、体幅約 10 mm の殻を欠くナメクジ状陸産貝類で、背面は淡橙色または灰白色で、左右の側面と正中線に淡褐色の縦条を前後に走らせるが、不明瞭な個体も多い。蹠面はベージュ色で、頭触角および第二触角は黒い。

本州・四国・九州に広く分布する *Meghimatium bilineatum* (Benson) ナメクジ・*M. fruhstorferi* (Collinge) ヤマナメクジや、対馬・五島列島などから知られる *M. sp.* ツシマナメクジに近縁であるが、背面の彩色が独特で、男女群島固有種と考えられる。

【生息生育情報】

男女群島の男島・女島の広葉樹林内に生息し、地表の落葉・朽木下や樹木のうろなどに見られる。2015年8月の調査では女島に多産していたが、男島では確認できなかった。両島の面積の合計は 4.15km<sup>2</sup> しかなく、本種はそのうち自然林が保たれた範囲だけに見られるため、温暖化に伴う林床の乾燥化、植生変化などによって短期間で危機的状況に陥る恐れがある。

【生息生育に対する脅威】

植生変化、土壌汚染、地球温暖化に伴う過剰乾燥、移入種による生態系攪乱、個体群の極小化・孤立。

（亀田勇一・福田 宏・川内野善治）

チリメンユキガイ近似種 *Meropesta* cf. *sinojaponica* Zhuang（バカガイ科）

【情報不足（DD）※新規】

【分布】①世界：日本。海外は不明。②全国：有明海。③県内：有明海。

【種の特徴】

殻長約 40 mm、殻高約 32 mm の二枚貝類で、横長の卵形で厚質堅固、よく膨らむ。殻頂は前方に寄る。殻表は灰褐色の厚い殻皮で覆われ、成長脈は粗く、放射条が枝分かちて縮緬状となる。この縮緬状彫刻は *Meropesta sinojaponica* チリメンユキガイに似るが、後種は殻が前後により長く

引き伸ばされ、極めて薄く壊れやすい点で一致せず、別種の可能性もある。また *M. pellucida* (Gmelin) ハブタエユキガイは殻の厚さでは本種に似るが、放射条は直線的で分枝せず、より微弱であるためやはり識別可能である。ハブタエユキガイは本来フィリピンや中国南部など熱帯に産し、国内の確実な記録はない。

### 【生息生育情報】

1974年3月に島原半島北岸の雲仙市国見町神代で、*Mesocibota bistrigata* (Dunker) ヒメエガイや *Volachlamys hirasei* (Bavay) ヤミノニシキなど現在絶滅が危惧される稀少二枚貝類とともに半片死殻1個が得られており、同地の砂泥干潟下部に生息していたと推測されるが、その後の産出記録は一切なく、絶滅した可能性が高い。神代周辺の干潟は諫早湾の閉切以降、軟泥の流失と貧栄養化が顕著で、環境が一変したことが主な消滅要因と考えられる。チリメンユキガイは有明海では2002年に熊本県宇土市で合弁死殻が得られているが、長崎県ではいまだ確認されていない。

### 【生息生育に対する脅威】

干潟の埋め立て・干拓・護岸、潮流変化、底質変化・汚染、水質汚濁、地球温暖化に伴う水温変化、個体群の極小化・孤立。  
(福田 宏・川内野善治)

### 【クモ類】

ゴトウヤチグモ上五島個体群(タナグモ科)【絶滅のおそれのある地域個体群(LP)※新規】



黒褐色で体長10mm前後になる五島列島の固有種で、福江島、久賀島、奈留島、中通島での生息が確認されている。分布域から判断して若松島にも生息するはずだが、若松島は本種の生息場所となる林床部分でのシカやイノシシによるとみられる荒廃が著しく未発見である。中通島でも個体数は少なく、雌のみが三王山で得られている。雌の外部生殖器には島ごとの形態変異が顕著に生じ、隔離による

変異や種分化を研究する上で生物地理学的に興味深い種である。  
(奥村賢一)

### 【昆虫類】

#### <蝶類>

台湾ツバメシジミ(シジミチョウ科)【絶滅危惧Ⅱ類(VU)→絶滅危惧ⅠB類(EN)】



台湾ツバメシジミは、海浜の林周辺、路傍、日当たりの良い林間の小道、草地などのやや不安定な環境に生息するシジミチョウ科の草原性の蝶。オスの翅の表は紫藍色、メスの翅の表は暗褐色。ツバメシジミに似ているが、翅の裏の暗色の点斑は濃黒色と淡灰褐色が点在し、尾状突起はより長い。長崎市、諫早市、南島原市などでも生息していたが近年ほとんど見ることが出来ない。多産地の福江島、平戸島、生月島でも激減している。本種の唯一の食草であるシバハギが、里山の草地や農地の放置による低木の

進入など植生遷移により衰退しているのが減少の原因である。  
(峰正隆)

<甲虫類>

シマゲンゴロウ（ゲンゴロウ科）【絶滅危惧Ⅱ類（VU）※新規】



体長 13mm 程度の黄色と黒の縞模様が目立つゲンゴロウ。全国的に減少が報告され環境省レッドリストの準絶滅危惧に選定されている。県内では県北部に見られるものの個体数は多くなく、今後も注視すべき種である。田植えの直後に死亡して間もない個体を水田で見かけることから、薬剤の影響のほか、照明の増加、圃場整備による乾田化、ウシガエルやアメリカザリガニなどの外来種による捕食が個体数の減少要因として懸念される。（大庭伸也）

ハラビロハンミョウ【絶滅危惧ⅠA類（CR）→絶滅危惧ⅠA類（CR）】

カワラハンミョウ【絶滅危惧ⅠA類（CR）→絶滅危惧ⅠA類（CR）】

ルイスハンミョウ【絶滅危惧ⅠA類（CR）→絶滅危惧ⅠA類（CR）】

（いずれもハンミョウ科）



これらの種は、すべて自然砂浜に依存する生活をおこなっている。長崎県でのそのような環境を有する自然度の高い砂浜はごく限られており、産地も極限的である。レジャー開発による砂浜の観光地化や、砂浜へ流れ込む小河川の改修工事などにより、徐々にこれらの種の生息環境は悪化し個体数も減少しつつあるのが現状である。また、これらの種は砂浜の昆虫類の捕食関係の頂点に位置する種であることが共通点として上げられる。砂浜環境の悪化は、これらの種がえさとしている小昆虫の減少に即決的につながることから、今後の開発には十分な注意が必要といえる。（松尾照男）